

〈実践〉ポピュラー文化を学ぶ人のために

(世界思想社 2005 年)



瀬 沼 文 彰

評者が、大学院に入学して間もない時期、本書を刊行するために、渡辺先生のゼミでは先輩たちが活発に議論を交わしていた。評者は、学部時代の不勉強のせいで、その議論には、まったくついていけず、何か意見を求められても、何も答えられず、いつでも黙って座っているだけだった。

ゼミでは、本書に関する発表や議論がしばしば行われたが、当時は、評者とはあまり関係のないものだと思い込んでいたし、特別な興味はいまいち持てていなかったと記憶している。

出版後、ゼミ生だった評者は、割引き価格で購入させてもらった。しかし、自分の修士論文の準備や日々の大学院の授業での宿題に取り組むために読まなければいけない文献がたくさんあったため、しばらくの間、本書は、自分の部屋の片隅に積まれていただけだった。

読み始めるきっかけになったのは、ゼミとは別の渡辺先生の授業で、本書のパート3の文献紹介をもとに自分の研究と結びつけた発表をすることになったときだった。評者は、自身の研究に近い「他者と人間関係」「メディア」「テレビ」を希望したものの、渡辺先生より直々に、「エリート主義、大衆、ポピュリズム」の項目

をテーマにするよう命じられた。

このテーマは、これまで一度たり考えたこともないし、知識だって、むろん皆無だ。そうした意味では、本書の読者対象である学部生よりもずっとひどい知識しか持ち合わせていなかったはずだ。それでも、まずは、指定された項目の見開き1ページを繰り返し読み、文中で紹介されていた面白そうな文献と特に重要であろう文献をいくつかあたり、指示された字数を大幅にオーバーしたレポートを書いて提出し、それをもとにしたレジメを作り、授業で発表した。ちなみに、渡辺先生からは、「あんなに長く書きなさいとは誰も言っていない」と言われたことを今でも覚えている。

きっかけは宿題ではあったものの、自分なりに問題意識を持ってみると、本書で紹介されていた文献は、評者の研究に結びつくことがいくつもあったし、評者の研究に対して、別の視点があることにも気づかされた。物事に対して、どのように興味を持っていくかを考えられた瞬間だったのかもしれない。そのおかげか、授業では、他の履修者の項目にも素直に興味を持つことができた。その後、本書は、修士論文を作成する際の文献探しなどで何度か活用したし、

〈実践〉ポピュラー文化を学ぶ人のために

博士課程に入ってから論文を書く際に、まずは、本書を開き、研究方法や文献紹介を参照した。

さらに、数年後、評者は、いくつかの大学で非常勤講師をすることとなり、そのなかの文化を扱う授業で本書を活用することとなった。その授業では、学生たちの興味のある文化、例えば、音楽や旅行、スポーツ、ファッション、映画、テレビ、グルメなどの歴史といまについて、グループを組んでパワーポイントにて20分程度で発表をしてもらう。その後、評者が別の切り口からそのテーマで講義をするという形式だった。

グループで最低3冊は読むことを条件に、本書の文献紹介のページを参考に、学生に文献を紹介する。当たり前だが、紹介するためには、まずは、自分が読まなければならない。いま思い出してもハードだったが、評者自身もこれまでほとんど触れていなかった領域の文献を次々と買い漁っては、耽読した。

この授業は残念ながら4年ほどで終わってしまったが、本書の研究方法の紹介や、ギュッと濃縮された文献紹介のコメントは大変明確で、授業でとにかく使いやすかった。学生にとっても、自分自身が興味のある対象を学ぶ意義があったはずだ。そして、何より、たくさんの文献に触れたことは私自身の学びとなったし、自分自身のさらなる興味の広がりを実感できたし、学生に教えるという作業を通じて、ある対象に対してどう深く潜り考察をしていくべきかを改めて知ることができた。

評者が身をもって経験したように、本書は、大学生や大学院生であれば、ポピュラー文化研

究の基礎知識を学べることはもちろん、身の回りにある文化を掘り下げ、卒論や修士論文の執筆に使えることは間違いない。ただし、強調したいのは、大学生に限らず、どの世代にとっても、本書は、自分にとって好きなポピュラー文化を深めていくきっかけになる。

それは、既に何年も趣味となっているものでもいいし、興味を持ち始めていることでも構わない。自分は、それがなぜ好きなのか、それをどう掘り下げていけばいいのか、本書では、それらを学ぶことができる。さらに、本書の文献紹介からも分かる通り、その好きなものをじっくりと考えた専門家は古今東西たくさんいる。それらのなかから1冊選んで読んでみることで、いままでに好きだったものに、もう一步、深く潜りそこに新たな視点や考えが生まれる。

こうした作業は、自分のなかのぼんやりした部分をはっきりとことばに変えていくことなのだと思う。それができることは、自分の人生を経済的ではなく、違うベクトルで豊かにしてくれることにつながるはずだ。

大学院に入るまで、消費社会にどっぷりで、いろいろなことに常に流されてきた評者にとって、本書と渡辺先生とそのゼミは、本稿で述べてきたように、物事にどう興味を持つかということと、そこに係るアイデンティティの問題、そして、それまでの評者には知るすべもない「豊かさ」に関する視座を与えてくれた。本書の書評を書くことが決まり、久しぶりに、付箋だらけの本書を手にとった。いろいろな色で引かれたアンダーラインは、自分の興味が広がっていったことを示しているようで、うれしくなり、にやついている自分に気が付いた。